



源流

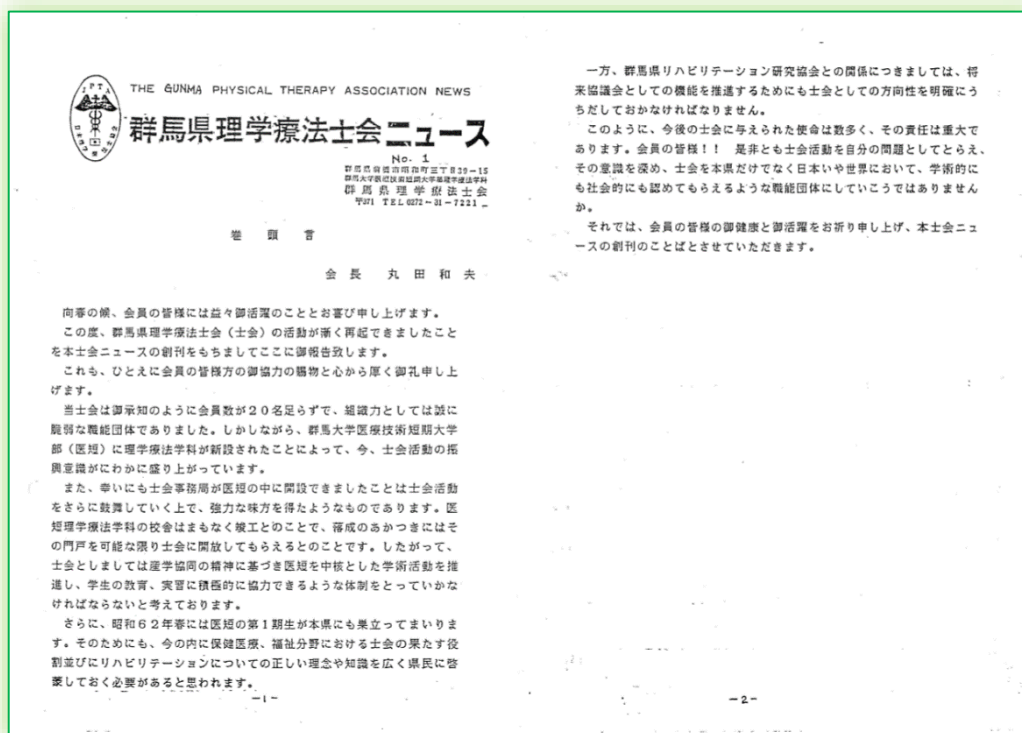
No. 150

Contents

■In memory of No. 150	02-04
■源流 150 号発行記念によせて	05-06
■理学療法アラカルト「非特異的腰痛に対する理学療法評価」津布子 夏実	07
■理学療法士が知っておきたい社会保障制度 ワークライフバランス部	08
■地域包括ケアシステムって何ですか？ 牧雄介	09-010
■書籍紹介「SJF 関節ファシリテーション 第2版」大桃 孝裕	11
■職場紹介「訪問看護リハビリステーション KODOU」柳 和希	12
■後輩理学療法士へ 船津智哉	13
■中毛・西毛ブロック「令和3年度施設間連絡会」開催	14
■群馬県理学療法士協会・作業療法士会・言語聴覚士連絡協議会 「アフターコロナを見据えた通いの場のあり方」開催	15
■第47回基礎講座・症例検討会 開催	
■群馬県 POS 連絡協議会主催 地域ケア会議研修会 開催	16
■ニュース收受	
■会員動向 ■編集後記 ■源流こらむ	17

In memory of No.150

一般社団法人 群馬県理学療法士協会ニュース源流は、今号で発行第 150 号を迎えました。今号では、ニュース源流の歴史を振り返ります。



群馬県理学療法士会ニュース 第 1 号 (B5 サイズ：見開き 2 ページ)

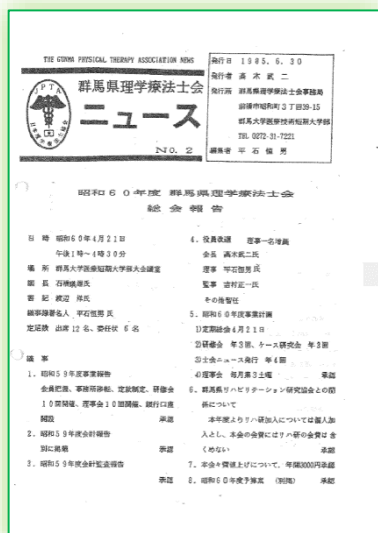
1985 年(昭和 60 年)4 月、記念すべき第 1 号が創刊されました。当時の会長 丸田和夫氏の巻頭言では、ちょうど群馬大学医療技術短期大学部理学療法学科が新設され、士会事務局が開設できたこと、産学協同の精神に基づいた学術活動の推進の必要性、保健医療福祉分野における士会の果たす役割とリハビリテーションについての正しい理念や知識を広く県民に啓発していく必要があることが力強く綴られています。

群馬県理学療法士会ニュース 第 2 号

1985 年(昭和 60 年)6 月、B5 サイズ、冊子 7 ページにて発行

丸田会長の後任の会長 高木武二氏の初感では、保険点数改正により厳しくなった業界の中で、士会としてそれに対応するために、会員一人ひとりが積極的に会の活動に参加し、外部への対応に備えていく必要があることが綴られています。

内外への広報活動の強化のため、広報担当理事が新設され、初代広報担当理事に、平石恒男氏が任命されました。平石氏の編集後記にあります、「それにしても会報発行を通して、日頃扱い慣れているはずの“自立”という言葉の重みをあらためて思い知ることが出来ましたことは、私にとっても思わぬ収穫でありました。」の一文に、当時の広報の大切さと編集の大変さを窺い知ることができます。感謝です。



群馬県理学療法士会ニュース 第 26 号

1991 年（平成 3 年）4 月、B5 サイズ、広告ページ込み 12 ページにて発行

士会創立から 12 年目を迎えたこの年のトップ記事は、これまでの春季研修会から発展を遂げた「第 1 回群馬県理学療法士学会」の開催報告でした。当時の広報担当理事 坂本雅昭氏が学会長を務められました。会員数 100 名に満たない中、10 演題の発表に、50 名を超す参加者に加え、ブラジルサンパウロからの留学生 2 名の参加があり、活発な質疑応答が交わされたと記されています。“士会における研究活動の活性化と若手士会員の研究発表の場をつくる”という目的が十分に達成されたこと、全国学会への発表への発展が望まれることが綴られています。私（現社会局理事 榊原）が広報部員としてニュース編集に参加させていただくことになったのもこの年でした。

群馬県理学療法士会ニュース 第 31 号

1992 年（平成 4 年）8 月、B5 サイズ、広告ページ込み 12 ページにて発行

本号では、岸正美氏が理学療法士として日本で初めて黄綬褒章を受章された、という理学療法士が社会的に認められたといえる、めでたい記事が、受章当日のご家族様との記念写真とともに掲載されました。

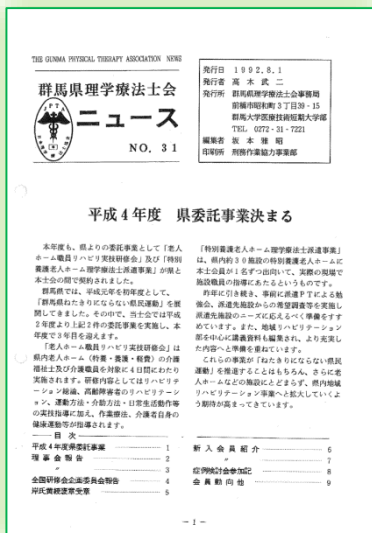
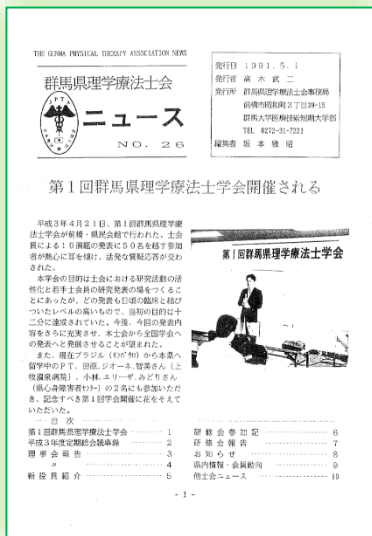
本号より、これまで編集部の手作業だったワープロ編集、リソグラフィ印刷、紙折り作業が、刑務作業協力事業部による本印刷になりました。刑務作業協力事業部は、赤レンガ塀で有名な前橋刑務所内にある印刷所。印刷の依頼のために門番の立つ刑務所に入っていくのはドキドキでした。この当時の会員数は、110 名（施設数 44）。ひとり職場もまだまだ多い時代でした。

群馬県理学療法士会ニュース 第 40 号

1994 年（平成 6 年）12 月、B5 サイズ、広告ページ込み 14 ページにて発行

本号では、10 月 6 日・7 日の 2 日間にわたり、群馬県では初の全国規模での研修会、第 29 回日本理学療法士協会全国研修会の開催報告が特集されました。

全国研修会を終え、各担当部署でご尽力いただいた先生方からの思いをたくさん掲載させていただきました。たくさんの方の諸先輩方とともに、私自身も技術担当として会場となった群馬県民会館と前橋商工会議所を駆け回りました。開催前日の準備中に、私は産気づいた妻の出産のため病院へ呼び出されました。皆様の温かいご配慮の下、この世に誕生した“全研くん”は、今年 28 歳になります（私事で申し訳ありません）。



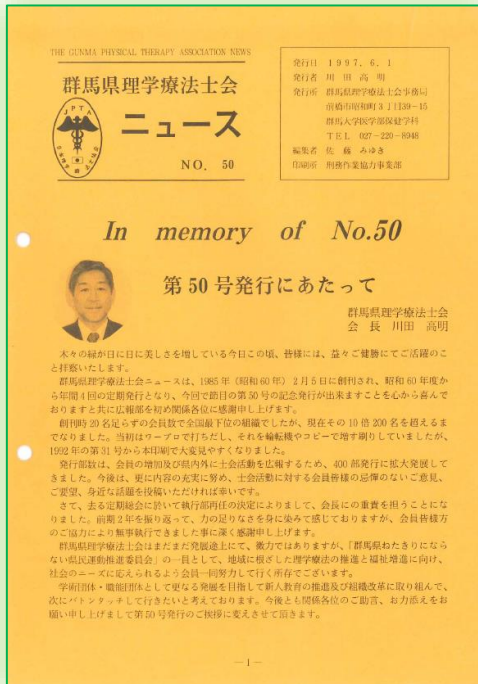
群馬県理学療法士会ニュース 第 50 号

1997 年（平成 9 年）6 月、B5 サイズ、広告ページ込み 14 ページにて発行

本号では、発行第 50 号を記念して、全 14 ページ、オレンジのカラー紙を使用したニュースとなりました。

今号と同じように、歴代編集者の先生方からのお言葉を頂戴しました。初代編集長の平石恒男氏からは、当時 20 名ほどの会員のうち 8 名が役員であるため、同じ会員の方に何度も記事を執筆いただいたことや、当時はディスプレイが 1 行 12 文字しかないワープロを使用しご苦労されたことが綴られています。2 代目編集長の坂本雅昭氏からは、ちょうど上記の第 31 号に記した手作業による印刷作業の苦労話が楽しい思い出となつて甦るとともに、仕上がったときの充実感も蘇ってくると思われています。このお言葉は、編集に携わっていただいている現編集部員にもいずれ感じられるものと思います。

本号より、新企画として現在も続いている会員の所属する職場紹介がスタートしました。



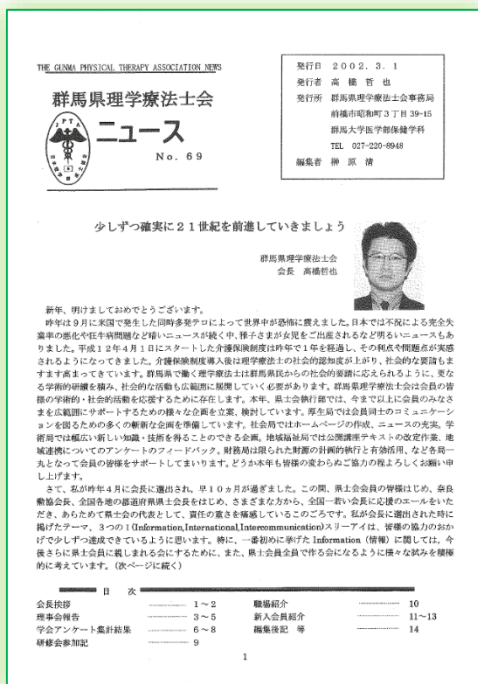
群馬県理学療法士会ニュース 第 69 号

2002 年（平成 14 年）3 月、A4 サイズ、広告ページ込み 20 ページにて発行

1999 年 6 月発行号より、B5 サイズから A4 サイズとなり、大きさのみならず、記事も充実してきました。

本号は、2001 年より会長を務められた高橋哲也氏の巻頭言で始まりました。その中では、2 年目を迎えた介護保険制度導入後、理学療法士の社会的認知度が上がり、社会的要請が高まる中、理学療法士はその要請に応えられるよう学術的研鑽を積み、社会的な活動も広範囲に展開していく必要があることが綴られています。このことは、歴代会長が述べられていたことと通じるものがあり、時代は変わる中でもその時代のニーズに合わせて対応ができるように努めることが理学療法士の使命であることを示しています。

この年、高橋会長就任時に掲げたテーマ「3 つの I（Information、International、Intercommunication）」達成に向け、会のホームページ制作の検討が始まりました。



みなさま、いかがでしたか？ニュース源流の歴史を振り返ってみると、あらためて理学療法士の使命について再確認することができます。と同時に、先人たちが築き上げたものの大きさに気付くこともできます。しかしながら、先人たちは、これからの理学療法士たちのことを過去に縛り付けることは一切しませんでした。常に先の先を見て、常に新しいものを求め、新しい時代の新しい理学療法士たちのために動いてくださいました。この先の時代を築いていくのはみなさまです。もしよいところがあるのならば、それを踏み台にして、次のステップを踏み出してみてください。（In memory of No.150 編集責任 社会局担当理事 榊原清）

源流 150 号発行記念によせて

源流題字の名付け親 前会長 浅香 満

源流発行 150 号にあたり、お祝い申し上げるとともに、これまでご尽力をいただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。

群馬県理学療法士協会のニュースは、会の発足当時から発行されてきましたが、私が会長を務めている時の設立 30 周年に合わせてニュースに名前を付けることになりました。私が名付け親になることとなり、1979 年（昭和 54 年）に 9 名の会員で発足した会が、30 年で約 100 倍の 900 名近い会員まで大きくなっていったこと、群馬県という地形から日本の大河である利根川の多くの源流を持ち、一滴の雫から多くの雫を集めて大きくなっていく様に群馬県理学療法士協会をたとえ、大きく発展することを願い命名しました。



現在は 2000 名を超える会員数を数え、益々大きくなることと思います。数だけでなく社会に貢献する役割も大きくなっています。一粒一粒のしずく（一人一人）が、集まって力を合わせることで、利根川のような大河となり、田畑を潤し多くの人の生活を豊かにしています。群馬県理学療法士協会も社会に求められ、必要とされる団体として益々発展されることをお祈り申し上げます。

3 代目ニュース編集長 伊勢崎市民病院 後藤雄一

群馬県理学療法士協会ニュース「源流」150号発行おめでとうございます。

私も遙か昔になりますが、ニュース編集に携わせてもらった者の一人として、150号の内の何割か作成したのかと思うと感慨深く感じます。

私が携わっていた当時は、群馬県理学療法士協会会員もまだ少なく、講習会も群馬大学で行われる事が殆どであったため、月に数回カメラを持って前橋まで通っていたのを覚えています。自分も講習会に参加するわけですが、写真をしっかり撮らなくてはとか、講習会参加者のどなたに参加記を頼もうかとか、そんな事を考えながら他の部員と協力・分担して講習会に参加していた事を覚えています。

ニュース編集の締め切り近くなると、仕事の合間にパソコンの前に座っている時間が長くなり、目がしょぼしょぼした事が懐かしいですね。又、当時は紙の時代であったため、印刷屋さん和原稿のやり取りもしました。その時はただ夢中でやっていたわけですが、振り返ってみると全てが良い思い出であり、無駄な事など無かったと思っています。

今現在、ニュース編集に携わっている方達も本業と掛け持ちで大変でしょうが、いつか振り返った時に貴重な経験をしたと思える時がきっと来ると思いますよ。頑張ってくださいね。

それでは、群馬県理学療法士協会並びにニュース編集部の益々のご発展を祈念致しまして挨拶とさせていただきます。

「読者がより一層その会を好きになるような工夫」

5 代目ニュース編集長 老年病研究所附属病院 中條浩樹

源流 150 号発行、おめでとうございます。私が編集に携わっていたのは何年前だったか、最近とみに記憶が怪しくなってきました。10 年以上前です。私がニュース編集部長の時に「源流」という名前に変わり、表紙やレイアウトを一新しました。それまでは「群馬県理学療法士会ニュース」という無味乾燥な名前でした。当時は協会でもなかったのです。



協会のホームページにニュースのバナーが追加されていたので拝見したら、現在はニュースも電子媒体に移行したのですね。しかもカラーではないですか。素晴らしい。私の時代はもちろん紙媒体、しかもモノクロでした。グレーではなく、2 色のモノクロです。写真の微妙な濃淡は印刷によりつぶれてしまうので、文字原稿と写真は別

に印刷業者に納品し、ページ数も製本様式を考えて 16 の倍数にするという、アナログならではの縛りがあったのです。

さて、私が今回の原稿依頼を賜るにあたり、会報誌とは何ぞや？というのを改めて調べてみました。類似のものに広報誌や社内報があります。すべて情報発信するものですが、宣伝が目的の広報誌や、情報共有による事業の円滑化が目的の社内報と違い、会報誌には「読者がより一層その会を好きになるような工夫」が必要だそうです。

え？これって言葉にすると単純だけど、実行するにはハードル高くない？そう思いました。私が編集部長だったころ、果たして実行できていたのだろうか？

今だから言いますが、実は私が編集部員になったとき、当時のニュースの表紙のデザインを見て、クソだせえと思いました。このニュースは、協会員以外に行政職員も見ています。県外の理学療法士も見ています。そんな人たちに「どうだ！これが群馬県理学療法士協会の会報誌だぜ！」とドヤるには、どうにも垢抜けなかったのです。別に当時の編集部長のセンスがクソだせえと言っているのではありません。単に時代に合わなくなったのです。ほんとに。だからもっと斬新なデザインの新しいニュースにしたい！という意気込みのもと、表紙のデザインを大きく変えました。その結果、少なくとも私はこのニュースがちょっと好きになりました。それが現在の表紙です。

私は興味の向く先がたまたま表紙のデザインでしたが、他の方はどうでしょうか？「もっとこうだったら面白いのに」と思うことがあれば、どんどんそれを実行してください。ニュースの読者は自分自身でもあるのですから、自分が良いと思うことをすれば「読者がより一層その会を好きになるような工夫」になるのでしょう。昔の人に遠慮する必要なんてないですよ。今の編集部員はあなた達なんですから。現在の部員は、現在のニュースの表紙を見て、どう感じているのでしょうか。クソだせえと思っていてくれたら幸いです。別に私のセンスがクソだせえのではありません。単に時代に合わないのです。ほんとに。もう私のカビの生えたデザインなんて、お払い箱ですよ。きっと今の時代に合った、ナウでヤングでイケてるセンスのデザインがあるはずです。見たいなあ～。それすごく見たいなあ～。

…これくらい言っとけばいいか。よし、近いうちにニュースのデザインが変わるぞ。

理学療法アラカルト

非特異的腰痛に対する理学療法評価

～みるポイント・視点を変えてみる～

善衆会病院 津布子 夏実



腰痛の理学療法に対して苦手意識を持たれている方は多いのではないのでしょうか？

腰痛は2019年国民生活基礎調査において、有訴者率が男性1位・女性2位と報告され、発症率が極めて高い症状です。腰痛は特異的腰痛と非特異的腰痛に大別されますが、臨床でより多く遭遇するのは非特異的腰痛であると思います。2000年代頃より、脊椎の安定性には分節コントロールが不可欠とされ、腰痛患者ではこれが障害を受けていることから、腰痛との関連が深く、非特異的腰痛の発症にも関与しているとされています。いわゆる体幹トレーニングも注目されていますが、腰痛診療ガイドラインでは、急性・亜急性腰痛に対する運動療法の有用性に対するエビデンスは不明とされている現状があります。しかし、臨床現場においては、ストレッチや体幹機能向上を目的とした運動療法で、臨床効果を実感できることも多いのではないのでしょうか？私の大学院での研究テーマは、非特異的腰痛についてでした。本分野は、国内外問わず多くの研究が成されていますが、まだまだ明らかにされていないことが多い分野でもあると実感しました。そこで、患者様へ運動処方をする際、より安全で効果的な運動を選択できることが求められていると考えます。

そこで、評価の視点を変えることで様々な情報を得られる簡単な動作2つをご紹介します。一つ目は「四つばい姿勢」です。この姿勢を起点とした様々なエクササイズがありますが、まずは基本姿勢を確実に保持可能か評価することが重要です。ポイントは①肩甲骨軽度内転②腰椎軽度前弯+骨盤軽度前傾位③肩関節の真下に手掌、股関節の真下に膝関節を保持できるかどうかです。この姿勢は、評価からエクササイズまで汎用性が非常に高いと思います。

二つ目は「cat & dog」です。四つばい姿勢が静的な評価であるのに対して、こちらは動的な評価になります。メリットは、可動域評価だけでなく、パフォーマンス評価も行える点です。評価のポイントは①脊柱・骨盤の屈伸方向の可動性②運動の切り替えのスムーズさ③側屈や肘の屈曲などの代償運動が生じていないか④口頭指示で動作が変化するか、などが挙げられます。座位や立位では脊柱可動域が保たれているにも関わらず、本動作で可動範囲が狭小化する場合には、モーターコントロールに問題があると捉えることも可能です。

ここまで2つの評価をご紹介してきましたが、機能評価よりも先に行うべきは疼痛部位の明確化です。新しい評価方法やテクニックに目が移りがちですが、簡単な動作評価で、新たな視点を持つことも重要であると思います。

参考・引用文献

- 1) 齋藤昭彦：腰痛に対するモーターコントロールアプローチ 腰椎骨盤の安定性のための運動療法, 第1版, 医学書院, 10-13, 東京, 2010.
- 2) 大久保雄, 金岡恒治, 今井厚ら：腰椎 Stabilization Exercise 時の四肢挙上による体幹筋活動変化, 日本臨床スポーツ医学会誌, 19(1):94-101, 2011.
- 3) 日本整形外科学会, 日本腰痛学会：腰痛診療ガイドライン 2019, 改訂第2版, 南江堂, 53-55, 東京, 2019.

「残業」を通してワークライフバランスを高める

日高リハビリテーション病院 大山祐輝

当院では、出勤時に業務量を推測して、残業の事前申請を行っている。もちろん、急な業務が発生した場合などは事後申請をすることができる。私は当会に入職して8年目になるが、この「残業」を通して、日々のワークライフバランスがより良いものになっていると感じている。

「残業」という言葉を聞くと、その時間の長さ、あるいは時間をいかに短縮するかに関して着目することが多いように思う。当院においても、残業時間が短縮し、効率的な業務を行うための様々な取り組みが行われている。さらに、「残業」とワークライフバランスを関連させて考えたとき、「残業時間をいかに短縮するか」に加えて、「各個人がいかに残業時間を正しく推測できるか」もとても重要であると思う。

私の個人的な話をすると、2020年の3月に、群馬大学大学院保健学研究科博士後期課程を卒業した。卒業までの(修士・博士を含めた)5年間は、「仕事と大学院をいかに両立させるか」ということをよく考えていた。そしてこの二つを両立させるために、もちろん残業時間を短縮させることも大切ではあるが、「残業時間をいかに正しく推測するか」も同じように大切であることを日々痛感していた。この推測が正しく行えることで、「今日は〇〇時に帰れる見込みだから、家に帰って〇〇の課題をしよう!」といったスケジュールを、朝の段階で行うことができる。当院で採用している残業の事前申請によって、こうした推測能力を高めることができたと感じている。

もう少し、「残業の事前申請＝推測能力の向上」を派生させて考えてみたい。私自身、約7年間、こうした残業の事前申請を行っていることで気づいたことがある。それは、仕事以外の生活においても、スケジュール(推測)が適切に立てられるようになったという実感である。現在も研究活動を行っているが、「今日は〇〇時まで研究して、〇〇時から趣味(秘密)の時間に当てよう!」といったスケジュールを、無意識に、且つ適切に立てられるようになったのである。これは、一朝一夕でなし得ることではないと思うが、一方で私自身、「スケジュール能力を高めるぞ!」と日々奮闘している自覚はなかった。私が感じるのは、約7年間の「残業の事前申請」という経験の蓄積が、こうした能力を高めてくれたのではないかと、ということである。

ワークライフバランスをWikipediaで調べると、「ひとりひとりの人が自分の時間を、仕事とそれ以外で、どのような割合で分けているか、どのようなバランスにしているか、ということ。」と記載されている。まさに、ワークライフバランスの精度を高める要因の一つは、日々の「残業の事前申請」ではないか!

これからも、「残業」を通して、ワークライフバランスを高めていきたい。

地域包括ケアシステムって何ですか？

一歩、踏み出して届けたい理学療法士の力

前橋地域リハビリテーション広域支援センター

老年病研究所附属病院 牧雄介

「90歳まで生きてる方は、元気よねえ」こんな会話を職場でよくしないだろうか。一方で、90歳を超える超高齢者のリハビリに苦慮することもあるだろう。このような、様々な身体機能や社会背景を持つ90歳が、最も多くなると試算されるのが、2040年です。加えて、人口減少・少子高齢化、単身世帯が4割、血縁による助け合い機能が低下するとも、言われています。このような問題を見据え、厚生労働省は「あらゆる人々が地域で共に生きる社会の実現=“地域共生社会”」を目指すとしています。この多面的な社会を支えるために、地域包括ケアシステムはこれからも発展する事が求められています。

すでに、私たちPTは急性期～在宅まで2025年を想定した地域包括ケアシステムの医療介護領域において、その役割を果たしています。そして、介護予防の分野でも活躍を始めています。しかし、2040年を考えたときに、もう一歩踏み出して考えてみることも大切なかもしれません。地域共生社会における地域包括ケアシステムは、今まで以上に「横の繋がり＝連携」が必要とされています。つまり、私たち専門職・住民・団体・役所が連携し、その地域にあった仕組みをデザインする。つまり「街づくり」です。医学・運動学・科学を武器に、チーム医療を日常とする我々PTは、街づくりにも十分にその力を発揮できると信じています。

次世代の理学療法を担う皆様、まずは、一歩、地域に出ることから始めてみませんか。ご自分の職場もしくは、住んでいる地域で「おらが街のリハビリの先生」、そんな風に呼ばれる日が来ることを目指して。

前橋地域リハビリテーション広域支援センターでは、通いの場評価事業や認知症カフェへのリハ職派遣、介護予防教室の講師の依頼などなど皆様の参加をお待ちしております。コロナ禍で蓄積したICTノウハウも生かして、職場などからの参加の準備もしております。また、情報発信も積極的に行っており、当センターの公式YouTubeは、一日1000回再生されるようになってきました。動画の作成などにもご参加頂けます。今年、新しく始まる企画もあります。皆さんのアイデアで楽しく地域貢献に一緒に取り組みましょう。

当センターでは、「地域リハ関連職種支援」は勿論、「継続的な地域への支援」、「PTなどの専門職と地域のつなぎ役」、「街づくり」、への貢献を果たしていきたいと思っています。そして、現状に留まらず、できること探し、腰は常に軽く、高齢者だけでなく障害者や地域まるごとを含めた、地域リハへの貢献を目指したいと考えています。

＊前橋地域リハビリテーション広域支援センターの活動へのお問い合わせは、下のQRをご参照下さい。



広域HP
活動内容
問い合わせ



広域ライン
ID：
@433nnsgrv



広域YouTube
研修使用
動画公開中

*****書籍紹介*****

「SJF 関節ファシリテーション 第2版」

医療法人社団 三思会 くすの木病院

大桃 孝裕



著者：宇都宮 初夫

出版社：丸善出版

価格：5500 円+税

皆さん初めまして。くすの木病院（藤岡市）で勤務をしております大桃孝裕と申します。私は理学療法士として働き出してから9年目になります。一般病棟で4年間、訪問業務を4年間担当させて頂いております。「昨日を反省し、今日を考え、明日に備える」をモットーに日々の業務に取り組んでいます。

訪問業務の担当時の課題は、「セルフケア」でした。訪問業務の利用者様は、週1回、40～60分のリハビリがほとんどでした。リハビリ後は、「身体が楽になった」「歩きやすくなったよ」などの言葉を頂けることがありました。しかし、翌週に確認すると前回と同じような訴えが続いておりました。どうすれば、良い状態を保てるのか？もしくは、不調になったとしてもセルフケアで不調の軽減を図れないか？などを考えておりました。その時に友人から教えてもらったのが、『SJF 関節ファシリテーション』でした。

関節ファシリテーションとは、「関節運動学に基づく接近技術を用いて、Mennellの関節機能障害(joint dysfunction)を治療し、自動・他動運動における関節の動きを量的・質的に改善する運動技術である」(宇都宮初夫RPT)と定義されています。

この治療を勉強してから一番嬉しかったことがRAの利用者様のリハビリでした。それまで、RAの治療では、マイルドな関節可動域練習、低負荷での運動、環境設定を行なっておりました。関節への直接アプローチをすることで、膝関節の疼痛軽減と歩行の安定性向上を図ることが出来ました。また、リハビリがない時もセルフケアにて状態を保てているとのことでした。

この本を読んでいると、自身の解剖学、運動学などの勉強不足を再認識しました。関節内運動の写真やイラストがあり、理解を深めることが出来ます。また、治療的運動の歴史なども書かれています。1950年代までに使用されていた「いわゆる伝統的な治療的運動(ROMex、Stretching)」と呼ばれる運動の種類から、現在使用されている治療的運動が何を基礎として実施されたかなどがまとめられています。

ご興味のある方は、是非御一読ください。



職場紹介

訪問看護リハビリステーション KODOU

柳 和希



1. 訪問看護リハビリステーション KODOU とは

訪問看護リハビリステーション KODOU は、平成 29 年 11 月に太田市の藪塚に事業所を開設しました。現在は、看護師 3 名、理学療法士 1 名、作業療法士 1 名の計 5 名で、介護保険及び医療保険での訪問看護サービスを展開しています。事業所名である「KODOU」は心臓の鼓動が由来となっており、私たちのサービスを通じて利用者様が、心を躍らせ、日々の生活が明るく営んでいけるようにスタッフ一同心がけています。「KODOU という名前はどのような意味なの。」と利用者様によく聞かれるので、名前を覚えてもらうきっかけにもなっています。

2. 訪問看護リハビリステーション KODOU の活動内容

当事業所の訪問地域は、太田市・桐生市・伊勢崎市・みどり市を主として、前橋市や邑楽郡、栃木県足利市等の地域にも訪問を行っております。年齢層は 40 代から 90 代の方までと幅広い年齢層の利用者様にサービス提供しており、ご利用されている利用者様の疾患は、整形疾患や内科疾患、呼吸器疾患、脳血管疾患、難病、精神疾患の方です。現病歴や既往歴を踏まえ、合併症、食事摂取や飲水の状況、ストレス状態、排便コントロール状態、生活環境の確認・評価を行い、その利用者様に合ったサービス内容の検討を行い、目標設定や問題点の立案を行うことで、サービス内容の実施に繋がっています。また、利用者様一人ひとりに合わせた個別トレーニングメニューの提案・指導や生活場面での動作指導、ケースに応じて利用者様のご家族へのアドバイスや介護指導を行ったりもしています。利用者様が安心してご自宅で生活を行っていただけるような関わりが行えるように日々看護師と連携を取りながら業務にあたっています。

3. 訪問看護リハビリステーション KODOU の特徴

当事業所は利用者様の訪問を担当制で行っており、利用者様やそのご家族との信頼関係を構築しやすく、訪問の際も、身体・心身の悩みから冗談話等の会話も家族同様におこなえ、利用者様にとって訪問時間が楽しく有意義なものとなるよう努めています。在宅という性質上、利用者様を取り巻く様々な状況の変化に対して臨機応変に対応することが求められますが、当事業所に勤務している看護スタッフやリハビリスタッフは経験が豊富で、リスク管理をはじめ、利用者様の状況・状態に応じてケアマネージャーや関係施設との連携を的確に行い、専門的かつ質の高いサービスの提供に繋がっています。

後輩理学療法士へ

榛名荘病院 船津智哉

皆さん初めまして、榛名荘病院で働いています理学療法士 6 年目の船津と申します。

1 年目の理学療法士の皆様は今いかがお過ごしでしょうか？きっと多くの方は毎日多忙と言いますか、見る事やる事初めての事ばかりで気が張りっぱなしで家に帰ったらすぐ寝るといった生活を送っていると思います。そんな毎日の中、人それぞれで将来の事を思って不安になってみたり、本当にこの職場で仕事を続けていけるのかと色々悩みは尽きないかと思ひます。

ここから先は私の経験からアドバイスをさせていただきますが、ひとまずは現状維持で良いと思います。その職場の仕事に慣れましょう。「流れのままに」というと多くの先輩理学療法士からお叱りを受けると思うのですが、まずは流れに身を任せて仕事をしましょう。新社会人でましてや医師や看護師程で無いにしろ人の命を預かる仕事をしているので、覚える事を付けないといけない事は他の社会人の方よりたくさんあります。そろそろ担当患者様の数も増えてくる頃合いではないでしょうか？失敗もあると思います。もしかしたらリスク管理が不十分で先輩療法士または医療職の方に怒られることもあるかもしれません。実は今言ったことが、この偉そうに講釈を垂れる先輩理学療法士の実体験だったなんてこともあるかもしれません。ですが、それも全部ひっくるめて理学療法士の仕事の「流れ」だと思います。いくら事前に勉強しようとも失敗する時は失敗してしまいます。大事なことはその失敗を恐れて「停滞」しないことです。その失敗を大いに反省・参考にして次のリハビリに活かす。失敗しないために先輩に相談し、気になったことを自分で調べていく。そうやって徐々に自分の仕事の「流れ」を作っていきます。何も新しい事を始める必要はないです。他の人とくらべる必要もないです。自分のペースで流れのままに仕事をしていき体を慣らしていきましょう。

そうやって仕事をしていくうちに 2 年目、3 年目と経験年数が上がっていき理学療法士という仕事に対して見えてくるものがあると思います。そのことをぜひ大事にして下さい。見えてくるものは人それぞれ違うと思います。その見えてきたこと、感じた事をもとに行動し自分の理学療法士としての「流れ」を作っていくください。願わくば、職場全体の「流れ」、さらにはリハビリ・医療業界全体の「流れ」を変えてくれることを期待しています。



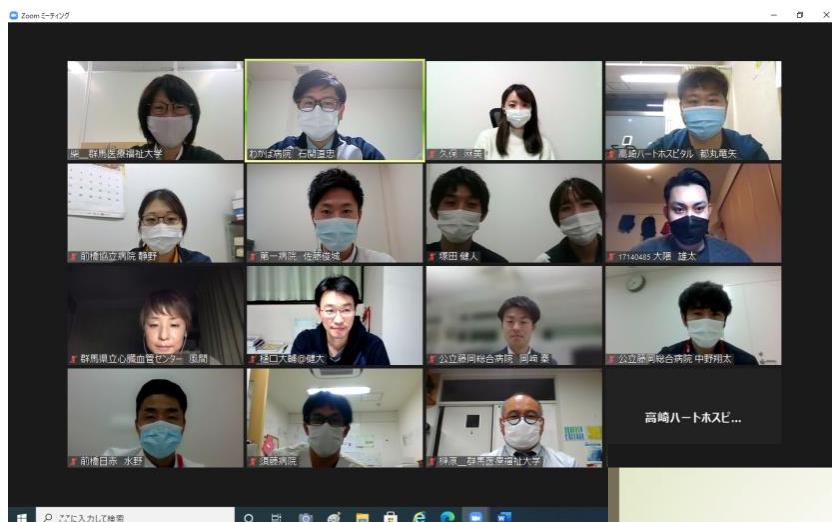
研修会報告

中毛・西毛ブロック「令和3年度施設間連絡会」 開催

令和4年1月21日、中毛・西毛ブロック令和3年度施設間連絡会が開催されました。「コロナ禍における理学療法士の対応～新人教育、施設内勉強会、対応方法～」に関するアンケート結果について公立藤岡総合病院の中野翔太先生より発表いただきました。対面での研修に変わり、オンデマンドで研修を開催されている施設や県の警戒度に合わせて延期や人数制限しての開催などを行っている施設などが見受けられました。研修の機会が少なくなっているといった意見の一方でオンデマンドやオンラインの活用によりスタッフ全員の参加に繋がる、子育て世代の参加もしやすくなったなどのアンケート結果を聞き、この状況に合わせて教育環境を見直し、作り上げていく必要があることを感じました。また、須藤病院の関口裕也先生に「須藤病院における新型コロナウイルス感染症対策」についてご講義いただき、PPEを着用した中でのリハ実施の困難さや感染を広げないために現場での介入に難渋している事柄などを学ぶことができました。

公立藤岡総合病院の岡崎泰先生には「新型コロナウイルス感染症患者に対する理学療法経験」についてご講義いただきました。実際の症例紹介の中でHFNC使用時の感染対策や復職に至ったコロナ患者様への介入経過などを学ぶことができ、とても貴重な機会となりました。

その後のディスカッションでは各ブロックに分かれ、各施設のコロナ患者受け入れ状況や実際のリハ介入、施設の感染対策の在り方等について情報交換が行われました。



リハビリテーション科における感染予防対策 ～安心して医療を提供するために～

医療法人済恵会 須藤病院
リハビリテーション科 関口 裕也



医療法人 済恵会

須藤病院

群馬県理学療法士協会・作業療法士会・言語聴覚士連絡協議会

「アフターコロナを見据えた通いの場のあり方」 開催

令和4年1月21日に「アフターコロナを見据えた通いの場のあり方」のシンポジウムが開催されました。佐藤みゆき先生、篠原智行先生、目崎智恵子先生、齊藤道子先生の4名より発表していただきました。

コロナ禍で各地域での介護予防イベントや集いが減少し、高齢者のフレイルが課題となっている現在の状況に合わせ、青空体操やウォーキングなどの屋外活動の取り組み、オンラインを利用したイベントの開催など工夫がなされていました。今後もコロナ禍での生活が予想される中、ネット環境の利用やリハビリ職と住民と連携し、地域での介護予防の新たな活動を取り入れ、地域住民のサポートを実施していく必要があると感じました。(わかば病院 佐藤伊代)

第47回基礎講座・症例検討会 開催

令和4年1月30日に第47回基礎講座・症例検討会が開催されました。群馬大学大学院保健学研究科 山上徹也先生から、「認知症合併者への理学療法 基本・トピックス」について講義いただきました。認知症の本質に病識の低下があることを理解し介入することが必要であることを学びました。また、動機付けを工夫しご本人の意思決定を支援していくこと、自宅退院や豊かな生活の継続に繋げるためにいかにBPSDの予防、軽減するかが重要であるかについて分かりやすくご講義いただきました。

「認知症を有する患者に対する理学療法」について平川病院 リハビリテーション科 上園紗映先生より、認知症治療病棟での認知症者リハビリテーション料や算定要件についてご説明いただきました。また、認知症病棟での転倒予防や関連する要素についてご講義いただき、要因の分析や環境改善などが重要であると感じました。症例を通して具体的な対応技術や行動分析的視点について解説いただき、患者様や利用者様の行動を変容させる前にセラピスト自身の行動変容を促すことを学び、明日からの臨床に生かしていきたいと感じました。

症例検討会では公立七日市病院 小林壮太先生、榛名荘病院 清水優先生、内田病院 福島 希夢先生、医療法人 あづま会 介護保険事業部長 松村 琢先生よりそれぞれ発表いただき、BPSDの軽減に向けた介入への工夫点や住み慣れた地域で本人らしくいられるよう理学療法士にできることなど、改めて学び、考えることができ大変貴重な機会となりました。



群馬県POS連絡協議会主催 地域ケア会議研修会 開催

令和4年2月25日(金)オンライン形式にてPOS連絡協議会主催の地域ケア会議研修会が開催されました。

群馬県の高齢化の状況や地域ケア会議での取り組みについて高原きよ美先生より、埼玉県での地域ケア会議を中心とした活動について岡持利巨先生よりご講義いただきました。

ご講義の中では地域ケアが必要とされるようになった背景から、リハビリテーション専門職として地域にどのように貢献することができるのか、具体的な実践例についてご講義いただきました。

地域ケア会議に参加する際には、会議の中で完結するのではなく、参加者や傍聴者が他のケースにも活かせるような視点での発言が重要だと学ばせていただく機会となりました。地域ケアについて、まず自身が住んでいる地域の住民や風土、歴史を知り、好きになるところから始めて行こうと思います。ありがとうございました。(わかば病院 小野 友也)

ニュース收受

2022/01/05	大阪府理学療法士会ニュース 第269号/12.31	大阪府理学療法士会
2022/01/05	和歌山県理学療法士協会ニュース No.94	和歌山県理学療法士協会
2022/01/14	広島県理学療法士会ニュース No.268	広島県理学療法士会
2022/01/18	秋田県理学療法士会ニュース第203号	秋田県理学療法士会
2022/01/18	士会だより No.193	兵庫県理学療法士会
2022/01/19	神奈川県理学療法士会ニュース No.290	神奈川県理学療法士会
2022/01/28	理学療法兵庫No.27 2021	兵庫県理学療法士会
2022/2/28	理学療法の科学と研究 2022, Vol.13 No.1	千葉県理学療法士会
2022/2/28	広報誌「かくどけい」 Vol.138	熊本県理学療法士協会
2022/03/04	大阪府理学療法士会ニュース第287号	大阪府理学療法士会
2022/03/08	滋賀県理学療法士会ニュース No.220	滋賀県理学療法士会
2022/03/08	岐阜県理学療法士会ニュース「らいちょう」No.139,140	岐阜県理学療法士会
2022/03/15	REGAC Vol.13	広島県理学療法士会
2022/03/17	サポーターズ NO.159 2022 春号	山梨県理学療法士会
2022/03/17	士会だより 2022 March No.194	兵庫県理学療法士会
2022/03/22	ゆまにて No.191	静岡県理学療法士会
2022/03/22	ゆきわり草 No.198	新潟県理学療法士会
2022/03/22	インフォメーション No.175	茨城県理学療法士会
2022/03/31	和歌山県理学療法士協会ニュース No.95	和歌山県理学療法士協会
2022/04/14	広島県理学療法士会ニュース No.269	広島県理学療法士会
2022/04/20	高知県理学療法 第28巻	高知県理学療法士協会
2022/04/21	公益社団法人 新潟県理学療法士会 創立50周年記念誌	新潟県理学療法士会
2022/04/22	神奈川県理学療法士会ニュース 2022April No.291	神奈川県理学療法士会
2022/04/25	理学療法京都 No.51, 2022	京都府理学療法士会
2022/04/25	秋田県理学療法士会ニュース 第204号	秋田県理学療法士会
2022/04/26	理学療法 湖都 第41号	滋賀県理学療法士会
2022/05/09	大阪府理学療法士会ニュース第291号	大阪府理学療法士会
2022/05/09	JPTA NEWS 2022.4 APRIL Vol.336 NO LIMIT Vol.89	日本理学療法士協会

会員動向

令和4年5月11日現在

会員数 2,067 名、休会 256 名、施設数 319 施設

＊ ＊ ＊ 編集後記 ＊ ＊ ＊

この源流の編集に関わらせていただき、今年で 8 年目となりました。部員となった当初は執筆依頼の電話もかなり緊張し、研修会の取材に追われ、編集作業にも時間がかかっていたのを思い出します。この数年間で自身の働き方や家庭環境が変化しただけではなく、研修会も対面からリモートでの取材へ、紙媒体から電子媒体へ、とニュース編集部の活動も大きく変化してきました。そして、今回この 150 号という記念すべき号の編集に携わることができ、とても感慨深く思います。

この場を借りて記念号発行にあたりご挨拶いただきました浅香満先生、後藤雄一先生、中條浩樹先生、また、執筆や取材に協力して下さった皆様にお礼申し上げます。

今後も皆様の役に立つ情報を発信してまいりますので、群馬県理学療法士協会ニュース「源流」へのご協力をよろしくお願いいたします。

石関 直忠



群馬県庁と利根川

源流こらむ

群馬県理学療法士協会ニュース「源流」が WEB 版になって 1 年経ちました。

表紙の題字は、「源流」と命名された前会長浅香満氏の直筆によるものです。「数多くの源流を持つ群馬県、最初の一滴が集まり川となり坂東太郎（利根川）となる。士会員一人一人が集まり、大きな流れとなるように。そんな思いが入っています。」

これからも幅広い情報を皆様にお届けします。ご愛読よろしくお願いいたします。